

著作・演劇などによる水環境の浄化運動

山本 鉦太郎

はじめに

千葉県北部の松戸や柏、流山、野田、我孫子あたりは東葛地方と呼ばれ、そこには約110万人の人口が住み、多少田園の香りを残しながらも東京のベッドタウンとして賑わっている。そしてこの周辺には、利根川や江戸川、利根運河が流れ、手賀沼や五駄沼、古利根沼、こんぶくろ池といった小さな沼が散在している。

手賀沼もかつては白樺派の志賀直哉や武者小路実篤、バーナード・リーチ、柳宗悦、そして講道館の嘉納治五郎や大ジャーナリスト杉村楚人冠らが住むほど美しい沼であった。夕映えの富士なども見え、大正から昭和のはじめにかけて多くの文人墨客たちが好んで訪れ、たくさんの歴史や文学の史跡がある。

ところが戦後乱開発が進み、工場廃水や家庭の雑廃水が東葛地方の各河川にどんどんたれ流され、それらが利根川や江戸川、利根運河、手賀沼へ集中的に流れこんで、どこもかしこも臭気におおわれ、いちじるしく自然が損なわれた。

大正の頃、手賀沼では水泳ができ、湧き水も飲み、サヨリやスズキ、ワカサギ、ヤマベやウグイ、ハゼなどがたくさんすみ、またカワセミやヨシキリ、クイナ、キツツキなども多い野鳥王国であった。それがいまや夏になれば湖面をアオコが覆いつくし、何万びきもの魚が白い腹を浮かせている。

オランダの技師ムルデルが心血を注いだ8.2キロのすばらしい利根運河もいまや汚れ放題だし、利根川や江戸川の水も汚い。明治時代は利根川や江戸川の水は井戸水よりおいしく、小舟で川の流れの中央まで漕ぎ出し、その水で茶を飲むといいと古老はよく語っていた。

地元の人たちはもう慣れっこで、そんなものかと思っているようだが、約40年前大自然を求めて東京から来た私にはなんとともゆゆしき問題であった。

ふるさとを愛せ、自然を取り戻せと言われても、なかなかその気になれないが、ふるさとの歴史の深さ、

よさを知れば、自ずと愛郷精神も生まれるだろうと思った私は、新設の流山市立博物館とも相談して、流山市立博物館友の会を設立し、それを核にして市民に呼びかけた。こうした社会運動は一人ではできない。多くの同志を集めることである。

初めは流山市民だけだったが、いまやグローバルな時代で、明治時代に作った行政の枠に縛られるのはまことに愚かなことだと思い、近隣の柏や松戸、野田、我孫子、関宿にも呼びかけて組織をどんどん広げ、一時は550人までに成長した。

次々に啓蒙書を出版

こうした市民運動を大々的に展開するにはやはり一人一人理論武装する必要があると思い、長い、長い年月をかけて多くの著書を著わしてきた。

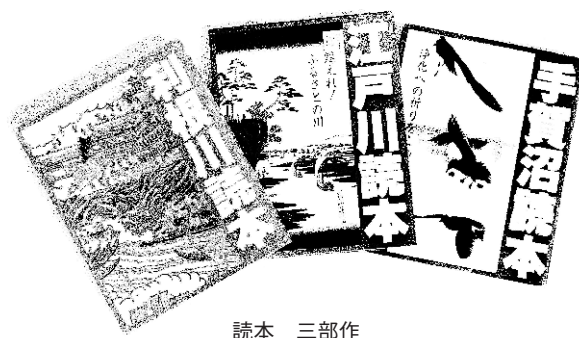
- ・「川蒸気通運丸物語」(1980・11)
- ・「旧水戸街道繁盛記」上・下(1990・10)
- ・「新利根川図志」上下巻(1997・6)
- ・「江戸川図志」(2001・6)
- ・「房総の街道繁盛記」(1999・8)

これらの本を読めば、房総の歴史がだいたいわかり、少しは環境問題にも関心を持って頂けるのではないかなと思ったが、しかし、これだけではまだまだ不十分だ。

そこで私たちの趣旨に賛同してくれた会員たち一人一人が論文を書けるよう、やさしい文章講座を立ち上げた。私が講師となって毎月第2土曜日の午後1時半から5時まで、流山北部公民館で25年間1日も休まず文章修業をつづけ、今や主だったリーダーたちはみな自分の著書を持ち、エッセイストとして活躍している。

そして年に一度「東葛流山研究」という論文集を出して、会員はもとより東葛じゅうの図書館、公民館、大学、流山市内の小中高校へ無料配布、書店にも出している。毎回二百数十万円の制作費がかかるが、それらは有志の広告や会員たちの特別賛助金などでどうにかまかなってきた。

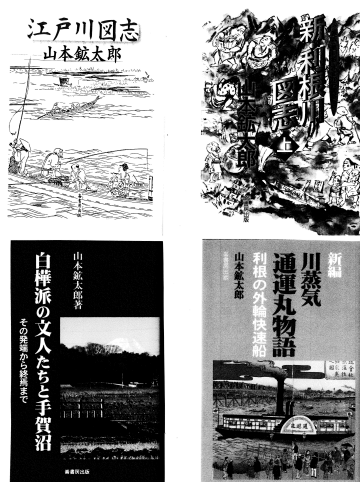
旧江戸街道繁盛記 上下 山本鉦太郎著 明治30年刊 上下二巻 本巻上巻二二頁、下巻二〇頁 本巻七二頁、七三頁	房総の街道繁盛記 山本鉦太郎著 明治30年刊 本巻三三頁	新・利根川図志 上下 山本鉦太郎著 明治30年刊 A5 本巻上巻二八頁、下巻二六頁 本巻三〇〇頁、三〇一頁	川蒸気通運丸物語 明治 本巻を基に撰じた新編の快速船 新巻一、二八頁 本巻六八頁
---	--	--	---



読本 三部作

大量動員に演劇を

そこで、ふと思いついたのは芝居やオペラ、ミュージカルなど演劇公演による大量動員であった。講演会をしても、研究会や撮影会をしても、歴史文学散歩をしても、集まるのはせいぜい3、40人ぐらいなもの。こんなレベルでやっているのは、せまりくる大汚染にはとても対応できない。



著書

平成24年3月、ついに30冊目を出版した。主なテーマは次の通りである。

- ・利根運河特集(第3号)1984、168ページ
- ・手賀沼読本(第9号)1990、304ページ
- ・江戸川読本(第10号)1991、264ページ
- ・利根川読本(第11号)1992、244ページ
- ・江戸川の歴史と暮らし(第12号)1993、250ページ
- ・東葛の湖沼と河川(第14号)1995、268ページ
- ・東葛観光歴史事典(第16号)1997、140ページ
- ・東葛文献百科事典(第19号)2000、252ページ
- ・東葛なぞふしぎ事典(第20号)2001、192ページ
- ・楽しい東葛始め事典(第28号)2010、128ページ
- ・楽しい東葛伝説民話集(第29号)2011、156ページ
- ・楽しい東葛地名事典(第30号)2012、192ページ

しかし、このレベルの運動や出版活動だけでは東葛地方の河川湖沼をきれいによみがえらせることは到底できない。いかに深刻になっているかは、沼や川のほとりに立てば一目瞭然。このあとどうすればいいのかと悩む。微力な私たちにできることは何か。

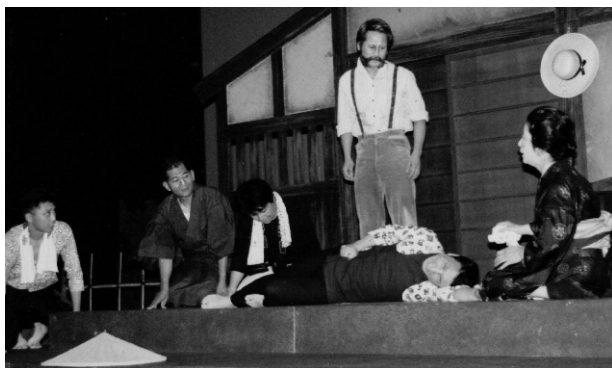


「青年たちの運河」 ポスター

そこでまず手初めとして、昭和59年春、利根運河のほとりにオランダ人の技術者ムルデルの顕彰碑を建て、それを記念して私が台本を書いた芝居「青年たちの運河」を公演してみることにした。オランダの土木技師ムルデルと日本の青年たちが力をあわせてついに8.5kmの利根運河を完成させた感動の物語である。

野田の市民会館や流山、取手の文化会館などで何度も公演し、建設省の建設局長や野田工事事務所の方々も大ぜい友情出演して下さった。

明治33年6月18日、山縣総理を迎えて利根運河の竣工式が行われた。式は盛大だったが、そこには運河開削を提案した広瀬誠一郎やムルデルの姿はなかった。広瀬は過労死で、ムルデルは強制帰国。総理のテープカットで江戸川の水はすさまじい音をたてて運河へと流れた。花火の中、拍手と万歳の嵐、それは新し



芝居「青年たちの運河」中央：オランダの土木技師ムルデル



オペラ「手賀沼讃歌」白樺派の作家たちのアリア



オペラ「手賀沼讃歌」大合唱

い日本の夜明けでもあった。

会場を埋めつくした約1,000人の観衆は幕ごとに大きな拍手を送ってくれた。市民合唱による「明日を運ぶ河」の大合唱のあと、鳴りやまぬ拍手の中で出演者たちはみな泣いていた。

それから1ヶ月後の昭和60年4月28日、オランダ公使を迎えて利根運河のほとりでムルデルの碑の除幕式が盛大にとり行われたのだった。

反公害オペラ「手賀沼讃歌」公演

それから数ヶ月後のある日、「青年たちの運河」を観て感動したという若い作曲家がわが家にやってきた。「野菊の墓」などの野心作を次々に発表してきた仙道作三というオペラ作曲家で、ぜひ私の台本で手賀沼の浄化をテーマにした創作オペラを公演したいという。「日本一汚いと言われている手賀沼をあのままにしておいていいのですか」

と熱っぽく語る。かねてより“演劇”の効用を予測していた私には、まさに渡りに船だった。

さっそく意気投合し、1年ほどかけて「手賀沼讃歌」という台本を書き、昭和62年10月24、25日の両日、柏の市民文化会館大ホールで公演した。資金は広告と入場料と有志の寄附による。

主役は藤原歌劇団や二期会のプリマからだが、あと

はオーディションで選ばれた、音楽大学出の市民歌手たちだ。

舞台は大正のはじめの手賀沼のほとり。理想に燃えた評論家の柳宗悦やイギリスの陶芸家バーナード・リーチ、作家の志賀直哉や武者小路実篤たちが、手賀沼の美しい自然に憧れてみんな東京から我孫子にやってくる。一緒にウナギとりをしたり、舟遊びをしたりしながら名作にとり組む若き日の文豪たち。

父との不和や娘の死で悶々としていた志賀直哉もやがて立ちなおって、「城の崎にて」や「小僧の神様」など数々の名作を書き、結核と誤診されてしょんぼりしていた武者小路実篤も「新しき村」運動を興して夢の大地、宮崎へと去っていく。「民芸」という言葉をつくった柳宗悦の熱い民芸運動も我孫子から始まったと言ってよいだろう。

そして物語のラストシーンは大正10年3月、柳も老母のためいよいよ我孫子を去ることになった。「改造」の記者滝井孝作ら多くの関係者たちが見送りに来る。柳は言った。「手賀沼の霊気に触れたのは私だけじゃない。志賀も武者もリーチもだ。みんな手賀沼から明日の活力を得て力強く羽搏いていったんだ。手賀沼は私の太陽だった。手賀沼はわが青春のすべてであった」

船頭の三造も書生の近藤もみんな泣いている。少し歩いてふと立ちどまった兼子は感慨深げに言う。



オペラ「手賀沼讃歌」 ポスター



「手賀沼讃歌」 第三幕 出演者たち

「あなた、夕焼け富士が見えるじゃないの」

「まるでリーチのエッチングのような夕陽だなあ」

その夕陽の中を水鳥がシルエットとなって飛び去っていく。

四時間にわたるオペラで、初日は1,400人もの観客で埋まり2階からも3階からも、いつ止むともしれぬ拍手の嵐がふってくる。今しがた合唱を終えたばかりの約400人の合唱団員たちはみんな顔を紅潮させ、なかば呆然自失の態で立ちつくしていた。

日本一汚れたわがふるさとの手賀沼をなんとかしてきれいにしよう、澄んだ川にしようという切なる願いをこめて公演したオペラ「手賀沼讃歌」は大成功だった。その後、高島屋の後援でも再演され、「天声人語」でも日本初の反公害オペラとして大きくとり上げられた。

ミュージカル「こんぶくろ池のうなぎ姫」

その数年後、ミュージカル「こんぶくろ池のうなぎ姫」を手賀沼に近い柏のアミューゼで公演した。

こんぶくろ池というのは、国道16号線から入った旧柏カントリークラブ近くにある小さな池で、かつては豊かに清水が湧き、それは大堀川を通して手賀沼へと流れこんでいた。いま行っても信州の上高地の池や湿原を思わせる静かな森で、いかにも伝説の生まれそうな雰囲気である。そして地元の心ある人々はなんとかしてこの池を保存したいと懸命に運動している。

よし、この運動にも力を貸そうということで、こんぶくろ池をテーマにしたミュージカルを実現した。こんぶくろとは小袋の意で、池の形が小袋に似ているからだとか、あるいは木の枝にかけられた小袋を通りかかった者がとろうとしたら、「オイテケ、オイテケ」と池の中から誰かが言ったとか、いろいろな説がある。池の

うなぎをとって持ち帰ったところ、木の葉であったという説もある。そうしたさまざまな伝説が創作されてきたが、このミュージカルでは手賀沼の浄化をからめ、手賀沼の主の河童とこんぶくろ池の主の美しいうなぎ姫との恋物語を入れてコミカルなタッチで描いてみた。幼い子や小中学生にも浄化を訴えたいという思いがあったからだ。

ストーリーは遠く江戸時代のお話である。

ある日、柏の正蓮寺の村人たちがビクやサオを持ってこんぶくろ池にやって来た。三日も続けてのうなぎ取りで池はもう泥んこで汚れ放題。その汚れた水は手賀沼へと注ぎ、沼の主の河童はカンカンに怒って、水源地のこんぶくろ池へ抗議にやって来る。

すると、なんと池の主は世にも美しいうなぎ姫ではないか。抗議どころか、うつとりと見とれて二人はやがて恋を囁く仲となる。それにしても困ったのは村人たちのうなぎ取り。このままではうなぎたちも死に絶えてしまわねばならない。

そこで二人は名案を思いつく。うなぎが旅の僧に化けて村人たちに交渉に行き、もしこれからうなぎを取らないと約束すれば、田畑の作物を今までよりたくさんとれるようにし、もし約束してくれないのなら、今後は米を一粒たりとも穫れなくしてしまうぞとおどかす。驚いた村人たちは取らないことを強く約束する。

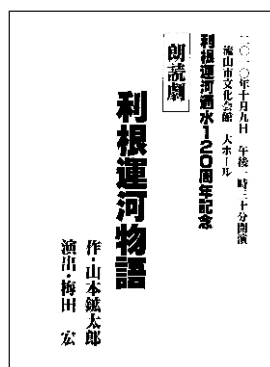
河童とうなぎ姫は大喜び。二人は池のほとりで手を組んで踊りながらパパーラパオ、パパーラパオ、おれは手賀沼のしゃれ男、今宵も通うぜ、こんぶくろ池、パパーラパオ、と陽気に歌い出すという物語である。

こうして芝居やオペラ、ミュージカルという新たな媒体を通じて、数千人の心ある人々に川の大切さを強く訴えかけてきた。

誰でも参加できる朗読劇

最近では市民たちによる朗読劇をやっている。朗読劇というのは、単なる朗読ではなく、大ぜいの出演者たちが本物の衣装をつけてメイクもし、音響やスライド、小道具などを駆使して、情熱をこめて台本を読みあうもので、芝居に近い雰囲気となる。これだと“暗記”という重荷なしに誰でも参加できるという気安さがある。

応募者たちは劇団の指導者のもと、半年ほどかけて練習し、いよいよ公演となると、多くの出演者の一家族けん族たちがぞくぞく見にやってくる。



「利根運河物語」

最近上演された朗読劇は次の通りである。

- ・「利根運河物語」利根運河通水120年記念 2010年10月9日
- ・「利根運河物語」再演、東京理科大学全国運河サミット公演 2010年11月7日
- ・「地図に賭けた男、伊能忠敬」2012年3月22日、野田市櫓ホール。利根川の治水にも尽力した男の物語。

もちろんこれに併行して各地で河川浄化のための講演やシンポジウム、討論会なども開き、従来通り出版もつづけ、平成23年10月には崙書房より運動の総集編ともいべき「白樺派の文人たちと手賀沼」を出版した。そしてそのあとがきでこう記した。

感動！手賀沼にサケ帰る

その後、手賀沼の浄化運動が加速的に進み、北千葉導水路も完成して、利根川の水を利用して沼のヘドロをかなり除くことに成功した。また市民の浄化活動もさかんになり、美しい手賀沼を守る連合会などたくさん環境保護団体が結成された。

ある日、新聞を開くと、サケが大堀川に遡ってきたというニュースがのっていた。

「えッ、あの日本一汚い手賀沼に、まさかサケが遡ってくるなんて、ウソー！」



各地で河川浄化の講演



「環境シンポジウム」
評論家 秋山ちえ子氏 ケビンショート氏の姿もみえる

と、半信半疑でビデオを持って大堀川の上流に自転車で駆けつけたら、なんと堰堤のところに数ひきのサケが傷だらけになってうずくまっているではないか。

「あっサケだ。サケが戻ってきたゾー」

と私は思わず叫んでしまった。日本一汚いといわれていた手賀沼に、また太平洋のサケが産卵に戻ってきたのである。

銚子から利根の大河を遡って布佐より手賀沼に入り、ここまでたどり着くにはどんなにか多くの苦難があったことだろう。サケよ有難う、よくぞ帰ってきてくれた、もうこれからは安心して遡ってきてくれと、語りかけた気持ちだった。手賀沼はついに日本ワーストワンから抜けだしたのである。

利根川の運河入口でサヨリが釣れたという明るい情報も入ってきた。かつてはシラウオやサヨリ、ウグイ、スズキ、ヤマベもいた手賀沼のこと、ぜひまたみんな元気で帰ってきて欲しいと願うばかりである。水は昔のように飲めないまでも、せめて安心して泳げる沼にしたい。それはまた、かつてこの地にすんだ白樺派の文人たちの熱い願いでもあったと思う。

山本 鉦太郎